

レ○プ犯が収容されたのは
性犯罪被害女性だけが看守を勤める民営刑務所だった。
更生プログラムという名の金責め生活が始まる！

玉子王子 著

1 レ○プ犯鳥居が送られたのは兎岳性犯男子刑務所、口答え一つで膝金蹴りで懲罰。

うさぎ県の古戦場兎岳には、数年前に民営刑務所が設立された。
その兎岳性犯男子刑務所には、他の刑務所にはない魅力があると噂される。

裁判所の前に止まっている車。
装甲車のようなバン。囚人護送用の車である。
今、五人の犯罪者が乗せられていく。
四人の男が乗っていく。
最後にもう一人。
タラップというか、足をかける場所の上で足を止める。
少し横にずらして、車に乗り込んだ。
誰も、何も気づかない。
一瞬のことだった。
その最後の男、鳥居が踏まなかった場所から羽虫が飛んで車を降りる。
一匹の、小さな小さな、誰も気づかないような羽虫。
鳥居は、別に虫が無事だったか目で追いはしない。
どうでもいい、と思っていた。
それでも、生き物なら避ける。
鳥居はそういう男でもあった。
車が走る。
鳥居は、その中で黙って座っていた。
レ○プ被害者は実は知り合いから被害を受けることが多いという。
鳥居が被害を与えた女性も、鳥居の友人だった。
酒に酔い、いけると思って強引に抱こうとした。

が、拒絶された。

そこでやめても強制わいせつかもしれないと鳥居は考えた。

素面なら、何とか許してもらおうと考えたかもしれない。

だが、酔っていたので無理やり押し切ってしまった。

やってしまえば、途中で相手が気持ちよくなってうやむやになるかもしれないと思った。

もちろん、そんな事はなかった。

終わって、無言で別れて次の日、職場に警察が来た。

逮捕、裁判、有罪となった。

そしていま、刑務所に護送されていた。

装甲車のようなバンに乗せられている。

運転席と後ろが分断され、後ろには犯罪者だけだ。

目の前に座る男。

目がきょろきょろと落ち着かない。

「い、いやだ……兎岳は嫌だ……」

これからいく刑務所の名前だった。

民間企業が刑務所事業を請け負えるようになってもう何年も経っている。

囚人を法曹関係から回してもらうためには、目だったり実績を立てたりとさまざまな売込みがいる。

経費を削減してアピールする所もあれば、特色を押し出すところもある。

「兎岳に何かあるんですか？」

今回がまったくの初犯である鳥居は、そういう事にまったく知識がなかった。

周りの男たちが驚いたように見てくる。

「知らないのか……」

「ええ。待遇悪いんですか？」

「いや。でも、看守とかスタッフが全員女なんだよ」

スタッフ全員女性。

何か女性客が来やすくしている会社のような響きだ。

男はなんとなく敬遠してしまう。

鳥居もそうだ。

もてるわけでもない普通の男の鳥居には、過度に女に囲まれるのはプレッシャーでしかない。

だが、それはそれだけのことだ。

「それで、ほかには？」

「いや……それだけだ」

首をかしげる。

看守たちが女だけ。

それが、それほど悪いことなのだろうか。

「女だけの刑務所なら、きめ細かいサービス受けられそうじゃないですか。いや、変な意味じゃなく」

「きめ細かいか……確かにそうらしいな。舌打ち一つで、その場で制圧だとか」

「それは……ほかの刑務所でも同じじゃ？」

「本当に何も知らないんだな……お前も、性犯罪やったんだろ？」

「……」

黙る鳥居。

何かの本で読んだことがある。

性犯罪者と人殺しは普通の犯罪者から敬遠されると。

どういう理由か忘れたが、普通ではないと思われるようだ。

「安心しろよ、俺もレ○プやった。ここには、重い性犯罪者しか送られて来ない、というか、受け入れない」

「性犯罪者だけを？」

そんな犯罪者の群れを、女性に管理させるというのか。

配慮がないのではないか。



「それと、看守とかな……」

俯き、真っ青な顔の男。

「全員、性犯罪の被害者なんだと」

看守全員女。

そして性犯罪の被害者。

そんな刑務所に、
性犯罪者の男ばかりが収監される。



「それと、看守とかな……」

俯き、真っ青な顔の男。

「全員、性犯罪の被害者なんだと」

看守全員女。

そして性犯罪の被害者。

そんな刑務所に、性犯罪者の男ばかりが収監される。

唾を飲む鳥居。

手が、思わず股間を庇っていた。

見ると、周りの男たちもなんとなく膝を締めたり、同じように股間に手をやっている。

「……まあ、キ〇タマ潰されるわけじゃないだろうし……」

最悪、潰されてもナノテクですぐに治る。

とは、男は言わない。

他人の玉ならともかく、自分の玉の話をするときには、そういうことは誰も言わない。

少なくとも、鳥居は言う気はなかった。

——冗談じゃない。次の日には治るからって……キ〇タマ潰される痛み、恐怖が消えるわけじゃねえはずだ。

股間が縮み上がる。

それでも、服を着ていれば表面上はなんともない。

ズボンの上から、縮んだモノを押さえながら黙って座る鳥居。

「そうだ、俺は加藤」

年嵩の男。

「一緒に入るんだ、よろしくな」

「俺、井上」

30少しの鳥居より若そうな男だった。

「まだ2回めなんだ」

「あめえな、俺は5回目」

「俺は白井。別れた妻に無理やり迫ったら、こうなっちまった」

鳥居と同じぐらいの年の男。

「俺は鳥居。酔っててつい、知り合いを」

鳥居は結婚していない。

こんな事になって、この先することがあるのかあまりいい未来は想像できない。

車が止まる。
刑務所についたようだった。

刑務所内の広場。
そこに、五人の新たな囚人が並んでいた。
周りには、三十人ぐらいの女看守。

「いいか、お前らと、そのキ〇タマはクズだ！」

ほとんど警察官というか、婦警に見えた。
紺のスーツに、警察っぽいマークのついた帽子まで被っている。
しかしよく見ると、違う。

同じわけが無い、そもそも刑務所は法務省の管轄で警察とは関係ないのだから。
民間企業の看守が、それらしい権威ある制服を着ているわけだ。
そういう女看守が並ぶ中、その女は熱弁を振るっていた。



「だが、お前らも
我々は見捨てない。
クズキ○タマを教育して、
真人間にしてやる。
そのための更生プログラムが
ここにはある」

「だが、お前らも我々は見捨てない。クズキ〇タマを教育して、真人間にしてやる。そのための更生プログラムがここにはある」

そんなもの、必要ないと鳥居は思う。

偶然こういう事になったが、元々そういうことをやってきた人間ではないのだと。

人一人犯しておいて、まだ彼は自分が普通の善人のつもりなのだった。

と、その表情に気づいたか、歩き回っていた看守が足を止める。

近くに来ると、茶髪のショートカットなのが分かった。

「貴様、その気の抜けた顔はなんだ！ 自分がどこにいるか、分かってないな！」

「いや、わかってます」

「口答えは懲罰対象だ！」

襟首を掴まれる。

突然のことで仰け反るだけ。

と、素早く女看守の膝が跳ね上がる。太股の肉付きはいいが、膝は当然骨の塊に近い。

それが跳ね上がる。

綺麗な膝である。

傷一つなく、滑らかな肌をしていた。

その肌が、鳥居の股間に命中する。

「おごっ！」

喉の奥が痙攣し、それ以上の声は出なかった。

ビチ、と何かが潰れるような音を鳥居は聞いた気がした。

肺も引き締まり、息が止まった。

肉袋が一瞬でギュンギュンに引き締まって遅まきながら肉玉を守ろうと分厚く包み込む。

が、それで肉玉が受けた膝金蹴りがなかった事になるわけもない。

痛い。

痛い。

肉玉が痛い。

ほかに何も考えられなくなる鳥居。

とにかく、腹の底から、今まで感じたことが無い痛みを百倍にしたものが襲ってくる。

——こ、これがキ○タマを潰される痛み。耐えられるわけねえ。キ○タマが、キ○タマがっ。キ○タマが痛いっ！

「ぬぐうう」

うめき、股間を押さえて膝を突く鳥居。

死ぬ。

というか、死んだ方が楽。

そう、本気で思えた。

今まで人並みに肉玉に打撃を受けてきた。

子供の頃喧嘩で蹴られたこともある。相手は女で、それだけに手加減がなかったと思った。

だが、子供の力で、やはり何処か加減はしていたのだろう。

今、肉玉から広がる、津波のような痛みが全身に広がるのを感じると思わざるをえない。

——なんてことしやがるんだあの女、いきなりキ○タマ蹴り潰すなんて……ありえねえ。

全身から汗が噴出す。

息が、やっとできるようになる。

引き締まってしまった腹筋のせいで、それも出来なかったのだ。

震えながら、息を吐く。

呼吸だけで、肉玉が痛む。

気が遠くなるのを感じつつ、看守を見上げる鳥居。

——自分が玉ついてないからわからねえんだ。なら、手加減しろよ。っ、い、いてえ、キ○タマがっ！

「うぎいい、うすあああっ」

口から意味のない呻きが漏れる。

ズボンの下に何とか手を入れる。

袋に触れる。右玉に指。痛みに仰け反る。

新たな金責めでもうけたような衝撃だ。

それでも、形を確かめる。

丸い。

楕円形の、普段どおりの肉球。左。

膝を突いたまま飛び上がりそうになる。それでも、指で触る。

気が遠くなるが、形は保たれていた。

肉玉は、二つとも無事だ。

涙が出る。

「ふん、キ○タマ蹴られたら、みんな泣くよな。不思議だ。そんなに本当に痛いのか？」

「ぐ、ぐ、なんで……」

痛む肉玉を抑えながら、息を搾り出す鳥居。

その姿に、自分たちもそれがついている四人の男たちは震え上がっていた。

縮み上がるそれを防御したいが、周りにいる看守たちが下手な動きを咎めてきたらと思うと動けない。

「口答えは懲罰だと言っただろう」

「……」

「そうだ、お前たちの返事は「はい」しかない。もしふざけた態度を取れば、こういう目にあわせる。……この性犯罪者どもが」
とんでもない所に来てしまった。

「もしキ○タマが潰れても、ここには山ほどナノカプセルが常備されてる。すぐに治るからそこだけは安心しろ」
だからか。

そういう風に思っているから、これほど強烈な金蹴りを食らわしてくるのか。

涙を流しながら、鳥居はこの先の生活に絶望的な影を見るしかなかった。

体験版、終わり

楽しんでいただけましたか？

よろしければ製品版で続きをどうぞ。